

産業革命とロバート・オウエン(二)

—— かれの農業論と生産力把握 ——

亀 山 潔

目 次

- 一 はじめに
- 二 一八一七年以後のオウエン
- 三 理想社会における農業
- 四 ウィリアム・フォラの書簡
- 五 『真理の鏡』と農業生産力
- 六 むすび

一 はじめに

前稿では、オウエンの一八二二年の著作『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』と、『新社会観』およびかれの最初の機関誌といわれる『ザ・ラバー・オブ・トゥーリス真理の鏡』を中心に検討してきた。そして、オウエンの思想的特徴がいわゆる通説と

産業革命とロバート・オウエン(二)

は異なり、ブルジョアの傾向をもつものであるとともに、かれが製造業を中心とした工業部門における生産力を積極的に認識し、把握していたことを見た。しかも貧民労働者とともに子供にたいする博愛主義的教育論、すなわち性格形成論も、じつは労働力の陶冶という、生産力的意図をもつものであることを明らかにしてきた。^①

ところで、オウエンが工業部門にかんする生産力を十分に把握していたことを明らかにしても、かれの農業生産力の把握については、一般に否定される傾向にある。古くはマックス・ベアにより、オウエンの農業論は無意味であることが指摘されている。^②最近の研究においても、たとえばガットレルによりこう指摘されている。「本来の人間関係は、イギリスの農村社会で達成されると、オウエンは信じ、農村社会に例証されているような「人びとの」相互依存と互恵〔の関係〕を意識的にニュー・ラナークの工場村落において再構成しようと試みたのである」と。^③ガットレルのいうオウエンの農村社会は「修道院的、ギルド的、村落共同体的小世界」をふりかえるというもので、オウエンの農業論そのものが回顧的であるというだけでなく、オウエンの思想全体がむしろ保守的であるとの見解である。^④

しかしながら、オウエンの農業論はマックス・ベアやガットレルの見解のように、古い共同体を回顧するもの、あるいは人力による鋤(スペード)の耕作は、まったく考慮に値いしないものなのだろうか。以下本稿において、この問題を詳細に検討しようとするものである。ところで、オウエンが農業のあり方を詳細にとり上げたものは、かれの主要著作の一つである『ラナーク州への報告』^⑤である。このなかでかれは理想社会を描いているが、その大部分は農業のあり方について言及している。オウエンを社会主義者として解釈する根拠の多くは、この著作によるものと思われるが、それにもかかわらず、オウエンの農業論が否定もしくはほとんど無視されていることをどのように考えたらよいのであろうか。^⑥

注

- ① 拙稿「産業革命とロバート・オウエン」——性格形成論と『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』——（『政経論叢』第一九・二〇合併号、一九七三年一月）。なお、拙稿「産業革命と空想的社会主義——オウエンとサンシモンの生産力把握——」（田村秀夫編『市民社会批判の系譜』中大出版部、一九七三年）を参照。
- ② Max Beer, *A History of British Socialism, with an introduction by R. H. Tawney*, 1919, Reprints in two Volumes in 1953, Unwin Brothers, Vol. 1, p. 180. 大島清訳『イギリス社会主義史（上）』（岩波文庫、一九七一年）三六ページ。引用文は必ずしも訳文と異なるが、以下ではそのうちの一部を引用する。
- ③ *A New View of Society and Report to the County of Lanark by Robert Owen*, edited with an introduction by V. A. C. Getrell, Penguin Books, 1970, introduction, p. 15. [] 内は用者。
- ④ Cf. *Ibid.*, pp. 15-7, 29, 45, & *passim*. ガットレルのオウエン保守主義解釈については、土方直史「ロバート・オウエン『新社会観』の成立とその構造」（中央大学『経済学論叢』第一四巻第五号、一九七三年九月）で紹介されている。
- ⑤ Robert Owen, *Report to the County of Lanark, of a Plan for relieving Public Distress and Removing Discontent, by giving permanent, productive Employment to the Poor and Working Classes, under Arrangements which will essentially improve their Character, and ameliorate their Condition, diminish the Expenses of Production and Consumption, and create Markets co-extensive with Production*, 1820. in *A New View of Society and Other Writings*, introduction by G. D. H. Cole, Everyman's Library, 1927. 永井義雄・鈴木幹久訳『ラナーク州への報告』（未来社、一九七〇年）渡辺義晴『社会変革と教育』（明治図書、一九六八年）一〇七一七八ページ。オウエンがこれを書いたのは、一八二〇年五月一日とはつきりしているが、出版年については、二〇年説と二一年説がある。この考証については、五島茂『ロバート・オウエン著作史』（大阪商科大学経済研究会、一九三三年）一〇三—一〇四ページ参照。以下 Report と略記。ページはコッレル版による。
- ⑥ しかし、すでにオウエンの農業論を取り上げたものもある。五島茂『ロバート・オウエン』（家の光協会、一九七三年）二二三ページ。ここでは農業生産力が正統に評価されている。堀経夫「ロバート・オウエンとデイヴィッド・リカードの対立——彼らの生涯（二〇〇年に因んで）——」（『日本学士院紀要』第三〇巻第一号、一九七二年二月）九二ページ以下。永井義雄『ロバート・オウエン試論集』（ミネルヴァ書房、一九七四年）二二四—二二五、二二九、二五八、二九四—二九五ページ。同訳『ラナーク州への報告』（解説）二二四ページ。R. H. Tawney, *The Radical Tradition, twelve Essays on Politics, Education and Literature*, edited by Rita Hinden, London, George Allen & Unwin, 1964, p. 34. 浜林正夫・鈴木亮訳『急進主義の伝統』（新評論社、一九六七年）四五ページ。しかし、一般にオウエンの農業生産力を正統に評価したものは少ない。

二 一八一七年以後のオウエン

オウエンが『ラナーク州への報告』を書くことになったいきさつについては、かれの『自叙伝』に詳しい。あらゆる地方のうちでも、ラナーク州がとくに失業者が多く苦しんでいた。だが、オウエンの工場があるニュー・ラナークでは、窮乏も苦情もなかった。このため、ラナーク州から「現在わが国の繁栄と平和を脅かす一大害悪と感じられるものになりたいする効果的な救済策を示せと求められた」。「州のこの要求にしたがつて、私は窮乏の諸原因を解明する報告書をつくった」。「この報告においてはじめて私は、全人類のために有益に性格を形成し、人間性を統治するための、一つの合理的社会制度を組織する科学を説明した」^①とオウエンは書いている。

この『ラナーク州への報告』は一八二〇年に書かれ、これにかれが理想とした社会コミュニティが描かれている。この共同社会の構想は、オウエンの基本理念である性格形成論を徹底させることによって形成されたものであると考えられる。^②このことは、右のオウエンの引用文中、傍点を付した部分、「全人類のために有益に性格を形成し」からも明らかである。しかしながら、オウエンを「社会主義者」として解釈しようとする古典的見解においては、性格形成論を書いた一八一二年ごろから、『ラナーク州への報告』を書いた一八二〇年ごろにいたるまでに、かれの思想が転換したとみられている。このような見解は枚挙にいとまがないほどあるが、古典的研究の一例としてマックス・ペアのことをあげる。「かれ〔オウエン〕は、人類を貧困から解放するための伝導生活へしだいにはいつていった。その使命の重大さが心にひらめいたとき、まさに無我無中になった瞬間であったにちがいない。そうなるための諸要

素は、徐々に集められていたのであって、一八一七年、ついにその諸要素が合体して一つになったのである。いまやニュー・ラナークの機敏な綿紡績業者は、社会主義者として生まれかわった^③と。

なるほど、一八一二—三ごろと、一八二〇年とのあいだに、イギリスの経済的・社会的・国際的環境は大きく変化した。一八一五年、ナポレオン戦争が終結し、イギリスの製造品にたいする需要が激減した。これにより一八一五年には経済恐慌が生じ、労働者の賃金は低下し、失業は増大し、他方では物資が山積みになっている状況をオウエンは見ていた^④。かれはすでにこの年に、危機を感じとり、外国貿易は「現在の水準を維持していくことがどうしても必要である」にもかかわらず、「これから徐々に衰退していくこともあるかもしれない^⑤」と憂慮している。そして、労働者の状態はといえば、「つぎつぎと時代の変化にしたがい、つまり競争心はひどくなるのに、富を獲得するのは前より容易でなくなるというなかで、勤労者の状態は、その徐々におこった変化を注意深く観察していかないものには想像もできないほど、きわめて惨めなものになってしまった^⑥」と認識され、工場法の必要性を訴えたのである。だが、それは、直接的に社会主義的主張であると、単純には考えられない。この考え方のなかに、オウエンの初期の著作に示されているブルジョアの傾向の強いといわれている性格形成論が適用されている。そればかりか、この翌年、つまり一八一六に“A New View of Society”として第一論文から第四論文までを一冊にまとめ、「真の意味の出版^⑦」をしたほどである。さらに、この年の元且には、かれの性格形成論を具体化した“New Institution for the Formation of Character”性格形成新学院を発足させた^⑧。

一八一五年の右のパンフレットでは、工場法の必要性を説きつつ、つぎのようにいう。「雇主としても、児童の工場就業を許可する年齢の規定と、入職前に良い習慣と一般学習の初歩を教育しておくことには反対しないと考えるま

す」。「子供を毎日一定の労働につかせるのは、一〇歳からにしたほうが、それより幼いときから使用するどんなばあいよりも、はるかに利益になる」^⑨と、オウエンが工場法の制定を主張する意図はもはや説明を要しない。かれの性格形成論の意図に基づくものであるからである。^⑩一八一五年の不況を経験したオウエンは、じつに多弁になる。一八一六から一八一八年には、ひじょうに多くのパンフレットを書き、集会を開いて演説を精力的に行なった。^⑪

オウエンが社会主義者に転換したといわれている年の翌年、一八一八年に幼少年労働者の状態改善のために、工場法の制定を主張し、工場主たちに訴えた文章がロンドンの新聞紙上に掲載された。「こんにち、わが国の工場制度においては、いかなる人の管理も受けることのない環境によりつくり出された慣行がひろがっている。したがって、このような環境のもとでは、何人といえども責められない。しかしながら、この環境は、周知のようにもつとも嘆かわしい不幸の源であり、わが国労働者階級の状態改善の方策を必要とするものであります」^⑫と、労働者階級の悲惨さを工場主たちに訴えている。この「訴え」でいう、労働者階級の悲惨のどん底に落し入れている「わが国の工場制度の慣行」とは、具体的に何か。大別して三つあるという。幼少年労働者の採用、長時間労働、極端な低賃金がそれである。この「訴え」全体の主旨は、これらの状態を改善し、労働者の不幸の源を除去するために、工場法を制定して「いかなる子供も一二歳になるまでは、製造業の屋内での仕事に従事させてはならない」^⑬ようにすべきであるというものである。このオウエンの主張を直接的に、ことごとくに受けとれば、労働者の立場に立った「社会主義者」としての側面が強調されることになる。しかしながら、この「訴え」における主張のなかには、すでに取り上げたように、性格形成論の意図が明確に示されている。「だれもが知っているように、賢明な農業者は幼なすぎるほどの若い役畜を使用しないだろう。はじめて役畜を仕事につかせるときは、最初のうちは徐々にさせる。だがわが国の多くの

製造業において七歳から八歳の子供たちが若者やあらゆる年齢の婦人とともに、一日一四―五時間も仕事につかせている^⑮。このような慣行こそ、「この国における各個人の利益に直接反することになる。つまり、これらの罪惡の（有益な）源が効果的に遮断されても、工場主たちの直接的利益を減少させることにはならない」^⑯と。以上のオウエンの考え方は、いかに国内の工場主＝資本家にあてた訴えであるとはいえ、明確な総資本の立場にもとづく経営者的感覺あるいは経営者の発想であつて、前述のとおり性格形成論の意図そのものであるといえる。

ついでオウエンは、当時の労働条件として、低賃金をあげ憂慮している。「あれこれの工場主により、賃金をもつとも可能なほどの低い水準にまで引き下げようとするあらゆる手段が用いられている。もし、ひとりの工場主だけが成功すれば、他の工場主も自己を守るために、それにつづかなければならない。だが、この問題が適切に考慮されるならば、低賃金、すなわち労働者階級のあいだでの合理的な慰安を求める手段の欠如ほど工場主にとって恐れられるべきものはほかにない」とオウエンは主張し、労働者階級こそが「あらゆる商品の最大の消費者である」^⑰という。

「賃金が高ければ、国が繁栄する。つまり、賃金が低ければ、最上層から最下層にいたるまで、あらゆる階級のものが苦しむが、とくに製造業階級がより苦しむことになる」と警告を発している。というのは、食糧はどんなことがあつても絶対に必要であるから、労働者の賃金のうち、食糧を購入した「残りの部分が製造品に支出されることになるからである」^⑱。「この国の、またあらゆる国の貿易、商業、製造業を支えるもつとも実質的なものは、その国の人口のうち、労働者階級なのである」^⑲。オウエンは、このように高賃金を主張しているであるが、その根拠は、多数の労働者の支出が一国社会の「有効需要」として、すなわち「市場」として認識していることによるものである。つまり、オウエンの高賃金の主張は、労働者の側に立つ社会主義的施策という発想によるといふよりは、むしろ経営者の観

点、社会的総資本の立場からの発想によるものであるといえる。^{②)}

このような、「有効需要」とか「市場」にかんするオウエンの記述は、一八一五年の経済恐慌を経験する以前の著作、『新社会観』のなかにはあらわれていない。ここに一八一五年の恐慌を経験したオウエンと、それ以前のオウエンとの微妙な相違を見ることが出来る。しかし、一八一八年に書かれたこのパンフレットにおいて、かれがブルジョア的でなくなったというのではなく、それほど長くない文章のうちに、「製造業者の利益」にかんする文言がひんぱんに出てくる。これと関連して、「外国の原料が異状に高く、『綿花の』栽培が巨額の利潤を得ていることにたいして不満^{②)}」を表明しているのである。しかしながら、産業革命期に「巨額の利潤」を得ていたものは、イギリス綿工業の経営者も例外でないどころか、その筆頭者なのであった。

以上のことから理解されたとおり、一八一五年の恐慌を経験し、一八一七年を過ぎたオウエンの思想は、社会主義者に転換したというよりは、むしろ、ブルジョア的性格が強いといわれている『新社会観』および、これの第一論文の直前に書いたとみられる『ニュー・ラナーク工場にかんする声明^{②)}』の延長であるといえる。一八一八年のオウエンは、一八二〇年に『ラナーク州への報告』を執筆したオウエンとそれほど遠い位置にあるとは考えられない。もしそうだとすれば、『ラナーク州への報告』における社会主義的あるいは共産主義的傾向をもつ理想社会の構想をどのように考えればよいのであろうか。それはつぎの課題である。

なお、この問題にはいるまえに、右にとり上げてきた一八一八年の「訴え」の後半に、救貧法を批判しつつ、「文明共同体^{ラメド・コミュニテイ}」ということばが出てくる。これは、一八一二年のパンフレット『ニュー・ラナーク工場にかんする声明^{マニファクチュアリング・コミュニテイ^{②)}}』における「製造共同体^{②)}」とくらべて、その意味するものがややあいまいになっているが、むしろそのために

普遍化したような響きを与えている。一八一八年の「訴え」はいう。救貧法は「絶えずさらに内部から文明共同体を攻撃するもつとも恐るべき罪惡を促進するものである」^②と。

ところで、本稿において取り上げようとする農業のあり方は、この「訴え」にはふられていない。製造工場主あてのものであるからである。しかしながら、オウエンは、すでに一八一七年三月の『貧民労働者救済委員会への報告』^③において、『ラナーク州への報告』の原型ともいえるべき、農耕を中心としたあの平行四辺形の構想が描かれている。^④この点からみても、一八一七年のオウエンと一八二〇年のオウエンとの距離は決して遠いものではないことが理解される。

注

① The Life of Robert Owen Written by himself with Selections from his Writings, Vol. 1, 1857, Reprints by Augustus M. Kelley Publishers, New York, 1967, p. 234. 五島茂訳『オウエン自叙伝』(岩波文庫、一九六一年)四〇六ページ。傍点は引用者。以下 Life と略記。

② 拙稿「産業革命と空想的社会主義」四三ページ。

③ Max Beer, op. cit., p. 165. 邦訳(一五)ページ。

④ 一八一三—四と一八一五—六年とをくらべると、商品価格は、たとえばコーヒー三一パーセント、砂糖四四パーセント、綿花四八パーセント、こしょう六五パーセントそれぞれ下落した(エリ・ア・メンデルソン、飯田貫一・平舘利雄・山本正美・平田重明訳『恐慌の理論と歴史』第二分冊、青木書店、一九六〇年、八七ページ)。これとともに、賃金と生計費が一八一五年と一八一九年にはかなり落ち込んでいる(『同書』第一分冊、三二九ページの表参照)。

⑤ Robert Owen, Observations on the Effect of the Manufacturing System: with Hints for the Improvement of these Parts of it which are most injurious to Health and Morals, 1815, in A New View of Society and Other Writings, 1927, ed. by G. D. H. Cole, Everyman's Library, p. 122. 渡辺義晴訳『前掲』四八ページ。以下 Observations と略記。

⑥ Ibid., p. 121. 邦訳四八ページ。

⑦ 五島茂『前掲書』二三ページ。

- ⑧ Life, p. 118. 邦訳「二五ページ」五島茂『ロバート・オウエン』(家の光協会、一九七三年)一五二―一五八―一七二ページ。
- ⑨ Robert Owen, *Observations*, p. 126. 邦訳五四ページ。傍点部分はいうまでもなくオウエンの性格形成論そのものにもとづいている。
- ⑩ 性格形成論の意図については、すでに詳論した。拙稿「産業革命とロバート・オウエン(一)」参照。
- ⑪ この時期のマンフレット講演については、『自叙伝』付録論文集(A Supplementary Appendix)に収録されており、その数は約二〇点ほどのほろ(五島茂『オウエン自叙伝』解説四三八―四四二ページ参照)。さらにオウエンは一八一七年にヨーロッパ大陸を旅行するなど、かれの生涯中もとても精力的な時期であった(Life, p. 166. seq. 邦訳三九二ページ以下)。なお、オウエンのこの時期については、つぎのものも注目すべきである。堀経夫「オウエンの『計画』に対するリカフダウの批判」(ロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集』家の光協会、一九七一年)五一―五五ページ。
- ⑫ ロバートの著書は46のEvermann's Library 及び『西蔵伝』のAppendix, N (in A Supplementary Appendix to the First Volume of the Life of Robert Owen, Vol. 1A, 1858. Reprints by Augustus M. Kelley Publishers, New York, 1967. —以下 A Supplementary Appendix と略記——)と、Letter to the British Master Manufacturers on the Employment of Children in Manufactories. というタイトルである。両者とも日付は一八一八年三月三〇日となっている。しかし、筆者が接したGoldsmith's Library 所蔵本のマイクローフィルムによるマンフレットでは、日付が一八一九年三月三〇日となっており、ちょうど一年間のちがいがあふ。これは単なる誤植とは考えられない。というには、この最終ページ(ハムージ)にもこれと同じ日付があるからである。やはり、一年後に再録して配布されたものと思われる。なお、内容および字句ともロール版『自叙伝付録』のマンフレットは同一であるが、改行箇所が異なっている。だがタイトルはつぎのとおりで、[付録]と異なる。An Address to the Master Manufacturers of Great Britain, on the Present existing Child* in the Manufacturing System. By Robert Owen, of New Lanark, Bolton, Printed by H. A. Swindells, Deansgate, 1819. なお*印のChildsの意味は不明。オウエンはChildrenのことと思われる。五島茂『著作史』のBibliographical Description にはこのタイトルのマンフレットには与えられていない。だがロール版のタイトルのものに基づいて説明されている『同書』八三―四二ページ)。
- ⑬ Robert Owen, An Address to the Master Manufacturers, p. 2. G. D. H. Cole (ed.), op. cit., p. 140.
- ⑭ Ibid., p. 3. Cole (ed.), p. 142.
- ⑮ Ibid., p. 4. Cole (ed.), p. 142.
- ⑯ Ibid., p. 2. Cole (ed.), p. 142. ……は原文イタリック。()については、労働者を悲惨な状態としておく「罪惡の源」は、個々人の工場主とすべきは fruitful なように、皮肉の意味がこめられて用いられている。
- ⑰ Ibid., p. 5. Cole (ed.), p. 143.
- ⑱ Ibid., p. 5. Cole (ed.), pp. 143-4.
- ⑲ Ibid., p. 5. Cole (ed.), p. 144. [] 内引用者。

②③ この観点からすれば、オウエンを「俗流経済学者」としてとらえている永井義雄氏の主張は理解できる。「資本主義が恐慌にあえいでいるのは、労働者に『恒久的生産的雇用』を与えないためであり、労働者にそれを与えないのは、とりわけ生産と消費との一致がえられないから」〔永井義雄「イギリス社会主義——俗流経済学者としてのロバート・オウエン」(内田義彦・小林昇・宮崎義一・宮崎庫一編『経済学史講座』第二巻、有斐閣、一九六五年)四一ページ。同『ロバート・オウエン試論集』ミネルヴァ書房、一九七四年、二三七ページ〕であるという内容こそ、まさにオウエンのこのパンフレットにあらわれる高賃金主張の理由であろう。なお、貧民に雇用を与えなければならないという視点は、すでに重商主義前期からみられるが、高賃金論の主張もすでにダニエル・デフォあたりからはじまり、スミスにより体系化された〔貧民雇用については、拙稿「イギリス重商主義と貧民——十七世紀における貧民雇用の諸提案を中心として——」(『政経論叢』第一五号、一九七一年一月)参照〕。したがって、オウエンの貧民雇用と高賃金はイギリス社会においてすでにいいふるされたテーマであった。だが、オウエンのばあい、同じいいふるされたものであっても、現実の社会経済にたいする認識のしかた、適応のしかたがオウエン独特のものであり、それだけに当時の人びとにとって新鮮さがあったと考えられる。

②④ Ibid, p. 7, Cole (ed.), op. cit., p. 146.

②⑤ このパンフレットについては、拙稿「産業革命とロバート・オウエン」で詳しく取り上げた。

②⑥ 「同論文」三五五ページ。なお、オウエンの救貧法批判の論理は、当時のブルジョアジーの論理を代表している。拙稿「産業革命と空想的社会主義」(田村秀夫編『市民社会批判の系譜』四一二ページ参照)。

②⑦ Thiel, p. 7, Cole (ed.), p. 146, 傍点引者。

②⑧ Robert Owen, Report to the Committee for the Relief of the Manufacturing Poor, to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor, referred to the Committee of the House of Commons on the Poor Laws, March, 1817, in Cole (ed.), op. cit., p. 156, seq. 渡辺義晴訳『前掲書』七二ページ以下。

三 理想社会における農業

オウエンが示した理想社会の構想は、一八二〇年にラナーク州上区のジェントルマン委員会の要請に応じた報告書、『ラナーク州への報告』において展開されている。この報告が要請されたいきさつについては、すでに簡単にふれたが、さつにつきのことを指摘する必要がある。一八一九年は一八一五年について生じた恐慌が実業界に突発し

た。オウエンは、このときの恐慌をつぎのようにつづけている。「人、為的に、生み、出された、一八一九年の窮乏ははなはだしく、何万という労働者階級の人びとは、失業して飢餓に頻し、また、労働者階級が失業すればつねにそうなるのだが、小商人たちは破産に追い込まれた^①」と。この一八一九年の恐慌は『ラナーク州への報告』が書かれた背景として重大である。

ところで、この『報告』の問題意識は、右の事実と直接的に関係がある。この『報告』の副題は、つぎのとおりである。「貧しい労働者階級の性格を基本的に改善し、また、かれらの状態を改良し、生産と消費の諸費用を減らし、生産と同じ規模の市場を創出する制度のもとで、貧しい労働者階級にたいして恒久的、生産的な仕事を与えることによって、公共の困窮を救済し、不満を除去するための計画について^②」と。この副題のなかには、オウエンの「性格形成論」そのものを示した部分もあるが、傍点を付した箇所のように、「性格形成論」にはなかった考え方がつけ加えられている。しかし、この考え方は、有効需要拡大による市場拡張ということ、すでに検討した一八一八年の「訴え」に示されている。だが、この考え方が前面に出ていることは、直接的には、恐慌の事実がより意識されているからにほかならない。「労働者階級の現在の仕事不足の直接的原因は、あらゆる富の生産過剰であり、現在の商業制度のもとでは、世界の全市場が供給過剰になっている^③」。農業も工業ともに破滅の前夜にあるが、それは「機械および化学における進歩が、現在の制度が許している消費量以上のものを生産する^④」ことになったからであるという。このために、オウエンは「市場の創出」が必要であるというわけであり、明らかに「過少消費説」の考え方を展開している。^⑤

こうして、「消費が生産と歩調を合わせるようにする新しい諸施策が必要となる」。そのためには、「第一に、土壌を耕作するばあい、犁(プラオ)をやめて、鋤(スピード)を用いること。第二に、鋤耕作を個々人にとって容易で有

利なものとし、国にとって有益なものとなるために、それを必要とする変革を行なうこと」をあげている。この変革のための施設として、つぎのような組織Ⅱ共同体をあげている。「改良された鋤耕および社会の全目的との関連において考えたうえで、土地耕作者の将来の組織のために、本報告者は、最少限度約三〇〇人、最高限度約二〇〇〇人の男子・婦人および子供を、自然的比率において結合させるような施設を形成し」、「土地耕作者は、また、つけ加えるのが有利であると思われる付属的職業にも従事する」^⑦。だが、オウエンはもつとも望ましい住民数を八〇〇人から一二〇〇人としている。このような組織は「共同の労働と消費と財産および平等な権利という原理に」もとづいた「農業村落」ではあるが、当時のヨーロッパの農業村落、あるいはアメリカにおける「連合村落」とはちがうと明確にのべている。^⑧というのは、「工業を付属物としてもつ農業に従事している全住民は、一定の地域においてその同一の地域が工業人口と区別される農業人口によって扶養しうるよりも多くの人数を、ずっと快適に扶養する」^⑨「農工業が調和する「共同村」を構想したものであるからである。こうして、労働者を食糧から切りはなさないようにすることが考慮されている。しかしながら、このことが直ちに「社会的分業も、工場内の分業もともに原則的に否定」^⑩されていると考えてはならない。この『報告』において、商業否定はなされているものの、「現物交換」あるいは「労働の価値を、任意の他の財貨の主要原価、あるいはそれに含まれる労働の量と交換する」^⑪ことが明確に肯定されている。さらに、この「農工共同村落」ともいふべきものの構想の背後には、高度の生産力をもつ機械の存在を前提としているのである」^⑫この『報告』においてさえ、「紡績機械のあやまつた運用によって生み出した諸害悪にたいする唯一の有効な救済策」を求めているとのべている。「肉体的・精神的および科学的労働の量が累進的に増大するであろうから、もし、われわれがこれらの施設のもとで人口が増大すると想定すれば、社会のすべての勤労にたいする、絶えず拡大する市場あ

るいは需要が、その範囲はどれほどであっても、同一比率で存在するであろう」^⑬とオウエンがいうとき、オウエンは生産力の不断の発展を展望していたのである。したがって、このばあいの工場は、機械を前提としていたのである。機械を採用する工場内で、分業が存在しない作業があるのだろうか。

さて、鋤耕作の問題に移る。馬に引かせる犁をやめて、もっぱら人力に依存する鋤を使用せよという主張は、右にみたような工業における生産力視点からすれば、一見したところ、否定的見解であるようにみえる。だが、オウエンはこうみる。植物を成長させるためには、土地がほどよく湿っていないなければならない。保水の必要性である。そのためには、土壌が粘土質のばあい深耕が必要である。したがって、「土壌はほりおこされる深さが、ふかければふかいほど、この重要な作業の利益はいっそう大きい」^⑭という。このことは、じつは、現代の農業技術においてさえも、妥当性をもっている。「大麦をその好適する土壌に栽培すると、生育は良好で収量も多く……、品質も極めて優良である。このような土壌は多孔質で排水佳良」のものである。「大麦は、乾燥に過ぎず、湿潤に過ぎず、耕土の深い土壌、もしくは砂質壤土を良しとする」。「小麦に適する土壌は、大麦と同様、耕土深く肥沃であること」^⑮を要す。つまり、オウエンは、すでにこの作物栽培の知識をもっていたわけである。

この時期のイギリスは、囲い込みが進行していたのであるが、土地生産性を高めることにも大いに関心が向けられていた。^⑯そのためには、「農業生産の集約化」^⑰さえ行なわれていた。ともかく、農業技術は、一八一―一九世紀における囲い込み以外に、新作物の導入、輪作方法、土壌の改良など、さまざまなものが試行されていたのであって、ノーフォーク農法として有名な大農方式のだけが唯一のものではなかったようである。ともかく、ラナーク州周辺のスコットランドでは、土質は粘土質で、排水不良であり、雨がふれば水がたまり、晴天が続けば土壌が乾いてしまうとい

う状態である。「冷湿の粘土地は新農業には適用されなかった」^⑪のであるから、オウエンがスコットランドにおいて深耕を導入して農業が行なわれるようにするとの主張は、能率を悪くするどころか、農業生産力をいちじるしく高めようとする積極的意義をもつものである。北緯五六度のスコットランドと五〇—五三度のイングランドとを同一視してはならない。最近の技術においてさえ、小麦の「経済的栽培の北限は、……スコットランドでは北緯五六度」^⑫といわれているほどである。なるほど、こんにちでさえも、燕麦がラナーク州の主要農作物であり、羊と牛が飼育されている程度である。オウエンやつぎにとり上げるフォラが、北国にも小麦が栽培できるよう努力したとすれば、それは、けっして無意味であるとは断定できない。

馬に引かせる犁耕作の欠点は、人手による鋤耕作の利点のちようと正反対であると、オウエンはつぎのようにいう。犁耕作は「深土をほぐすことなく、それを固めてしまう。犁の重いなめらかな表面や、馬の足がたえずふみつけることが、水をその下に浸透させないような表土を深土のうえにつくる傾向がある。多くの土壌では犁耕作を数年行なったあとに、水はそこにとどまって、多雨の季節には種子または植物を溺死させ、また、水をそこにとどめておきたいときには、急速に蒸発してしまう」^⑬と。

鋤耕作は右の欠点を取り除き、結局単位面積当りの収穫高を増大させることはほぼ間違いない事実である。つまり、それだけ農業方法を集約化することになる。^⑭しかし、一人当たりの生産量はどうかがつぎの問題である。「おのおのの馬が八人ないし十人の人間におきかえられる」^⑮とオウエン自身がのべているが、この『報告』には一人当たりの生産性についてはふれられておらず不明である。これについては、後述のウイリアム・フォラがみずから行なった実験の結果を、一八二〇年十一月一三日付けのオウエンあての書簡で詳細にのべている。

以上、オウエンが理想とした社会Ⅱ共同体Ⅱ平行四辺形における一部である農業のあり方を中心に、それを生産力の観点から検討してきた。ここで、指摘したいのは、『ラナーク州への報告』に書かれている共同体Ⅱ平行四辺形のあり方などが、この段階、つまり一八二〇年になって突然あらわれたものではないということである。この共同体Ⅱ平行四辺形の構想の原型は、すでに一八一七年三月一二日付けの『貧民労働者救済委員会への報告』^{②③}において示されている。ここでこれらの相違点と類似点とを詳細に分析するための紙面はないが、これは『ラナーク州への報告』と同じように、まず、貧民労働者の救済のために「貧民の子供が悪い習慣を教え込まないようにする」^{②④}という、性格形成論が前提となっている。共同体の構想も、一二〇〇人を単位とし、建物は平行四辺形にするなど、『ラナーク州への報告』^{②⑤}との類似性がきわめて強い。また子供の教育施設や共同炊事場、共同食堂のあり方は、『救済委員会への報告』^{②⑥}にも『ラナーク州への報告』にも示されている。^{②⑦}これの原型は、一八一七年の『救済委員会への報告』よりまえ、一八二二年の『ニュー・ラナーク工場にかんする声明』^{②⑧}に明確な形で示されている。一八二〇年段階のオウエンは、この面からも一八一二―一三年のオウエンの延長線上にいたことがわかる。さらに、この共同体の構想は、一八一二年の『声明』^{②⑨}にあらわれている「製造共同^{マニファクチュアリング・コミュニティ}体」を原型として、一八一七年の『救済委員会への報告』へと発展し、それからさらに一八二〇年の『ラナーク州への報告』へと明確につながっているといえる。

本稿の中心課題である農業については、なるほど『声明』にも『新社会観』にもあらわれていないが、一八一七年の『救済委員会への報告』には明確にあらわれてくる。『同報告』の共同体において、鋤耕作を行なう農業を前提にして、農工調和の社会が構想され、それぞれの施設の経費が示されている。^{③①}ただどうして鋤耕作をするのかという理由はまったく示されておらず、『ラナーク州への報告』に示されているような土壌のことや排水のことなどは、一八

一七年から一八二〇年までのあいだに、オウエンがたとえば、フォラのような農業者から聞いて知識を増していったものと考えられる。この辺の事情については、『自叙伝』でも語っておらず、推測の域を出ない。

ところで、一八一七年の『救済委員会への報告』におけるオウエンの生産力把握は、じつに明確である。まさに産業革命期のイギリス第一級の経営者にふさわしいものである。「これらの施策が採用され、実施されれば、……土地や労働の本当の価値は高くなるが、一方、土地と労働が生産するすべてのものの価値は下落するだろう。機械の社会にもたらす寄与と利益は、いっそう広汎なものとなり、あらゆる奨励により、機械の使用は拡大されるであろう。その拡大は、人間の労働と競争するものではなく、その援助をうけて、無限につづくであろう」と。さらに、オウエンは、共同体の建設そのものも、「設立者の利潤」が前提とされ、投資の対象とさえ考えられていたのである。このことは、『ラナーク州への報告』においても明記されている。「提案された諸施設のもとでは、土地、資本、労働は、現在公衆に知られている他のいかなるもののもとで用いられるよりも、はるかに大きい金銭的利益を生むであろう」^③と。この意味においても、オウエンの共同体構想は、当然のことながら自分のニュー・ラナーク工場を前提にし、モデルにしていたことがわかるのである。

注

- ① Life, Vol. I, p. 233. 邦訳四〇五—六ページ。傍点は引用者。一八一九年は、経済恐慌とともに、マンチニスターで議会改革運動のために集まった織機関係労働者の集会に官憲がおそいかり、一一名が死亡、数百名が負傷するという惨事、ビーノール事件が起こった。八月一六日のことである。
- ② Robert Owen, Report, Cole (ed.), op. cit., p. 245. 永井・鈴木訳『前掲書』三ページ。以下邦訳ページは本書のものである。
- ③ Ibid., p. 246. 邦訳九ページ。
- ④ Ibid., p. 253. 邦訳二二ページ。傍点は引用者。

- ⑤ この理論は「消費をこえる生産」が恐慌の原因だというジスモンディーを思わせる。中野正「ジスモンディー」(末永茂喜編『経済学全集 第四巻』河出書房 一九五五年)一二九ページ参照。
- ⑥ Ibid, pp. 253-4. 邦訳二二三ページ。……………は原文イタリック。
- ⑦ Ibid, p. 265. 邦訳四四一五ページ。……………は原文イタリック。
- ⑧ Ibid, pp. 265-6. 邦訳四六ページ。
- ⑨ Ibid, p. 266. 邦訳四七ページ。
- ⑩ 永井義雄『読論集』二二五ページ。しかし、同氏の記述は注⑧で直ちに部分的に否定されている(二二九ページ)。
- ⑪ Robert Owen, Report, p. 262. 邦訳三九六ページ。永井氏のいわれるように分業が否定されているならば、たとえば「つぎのオウエンのことばを、よく考へるべきか。」「生産の利潤は、あらゆるいかに、生産された財貨に含まれる労働の価値から生ずるであらうか。……」(Ibid, p. 263. 邦訳四〇ページ)。分業、したがって交換のないところに「利潤」が生ずるだろうか。
- ⑫ Ibid, p. 268. 邦訳三二二ページ。
- ⑬ Ibid, p. 290. 邦訳九五一六ページ。
- ⑭ Ibid, p. 254. 邦訳三二二ページ。
- ⑮ 三浦肆久樓『食用作物各論』(フツミ書房 一九五八年)一七一ページ。
- ⑯ 秦玄龍『農業革命史入門』(三才書房 一九四九年)一〇二ページ参照。ドイツでは、一八三〇年代に甜菜の導入とともに「イギリス流をまねた深耕と改良農具」が採用された [J. H. Clapham, The Economic Development of France and Germany, 1815-1914, Cambridge University Press, 1st ed. 1921, p. 51. 林達監訳『フランス・ドイツの経済発展』上(学文社 一九七二年)五八ページ]。
- ⑰ 秦玄龍『前掲書』一〇二ページ。
- ⑱ Cf. G. E. Mingay, Enclosure and the Small Farmer in the Age of the Industrial Revolution, Macmillan, 1968, pp. 18-9. 拙訳「産業革命期における囲い込みと小農業者」(国士館大学『政経学会誌』第三号、一九七四年二月)一四一四ページ参照。
- ⑲ Ibid, p. 19. 邦訳一四四ページ。
- ⑳ 三浦肆久樓『前掲書』一七一ページ。
- ㉑ Report, p. 254. 邦訳二四二ページ。……………は原文イタリック。こんにちのトラクターに引かせる通常の耕耘機でも、当時よりはるかに深く、二五ないし三〇センチの深さで廻り返えすことができるようである。それにもかかわらず、サブソイラー(深土起耕機)という大がかりな機械があり、約一メートルの深土にきずをつける。この作業は数年に一回ぐらいの割合で行なうことにより生産力が飛躍的に増大するといわれているが、人手や経費の関係で実際にはあまり行なわれていない模様である。
- ㉒ 実際に、産業革命期に「近郊園芸地帯では経営規模が、極めて零細で、たとえば「果樹栽培は、一ニーカー当りの必要労働力は平均一〇

傍点は引用者。

人で、売上高は一〇〇ポンドに達するというように、極めて集約的になっていた。そして、「わずかに教エーカーでも経営としての意味をもちえた」(椎名重明『イギリス産業革命期の農業構造』御茶の水書房、一九六二年、三六五—六ページ)ものもあったのであるから、オウエンの農業方法は、当時の技術水準から考えて、けっして軽視すべきではない。

㉓ Robert Owen, Report, p. 256, 邦訳二八二ページ。

㉔ Robert Owen, Report to the Committee for the Relief of the Manufacturing Poor, 1817, in Cole (ed.), op. cit., p. 156. 渡辺義晴訳『前掲書』七二ページ。なお、この訳文中、日付が「三月二一日」とあるが、これは「三月二二日」の誤植と思われる。

㉕ Ibid., p. 159, 邦訳七二七ページ。

㉖ Ibid., p. 161, 邦訳七九二ページ。

㉗ Ibid., pp. 161, 163, 邦訳七九、八二二ページ。

㉘ Cf. Robert Owen, Report, p. 268, 邦訳五一二ページ参照。

㉙ Robert Owen, A Statement regarding the New Lanark Establishment, Edinburgh, printed by John Moir, 1812, pp. 14-5, 36 ペン
ン・ハート(1812)は、拙稿「産業革命とロバート・オウエン」(『三二二ページ』)注①参照。

㉚ Cf. Robert Owen, Report to the Committee, Cole (ed.), op. cit., p. 164, 邦訳八二三ページ「施設の明細書」参照。

㉛ Ibid., p. 167, 邦訳八七二ページ。傍点は引用者。

㉜ The Mirror of Truth, Nov. 7, 1817, p. 58, これについては後述五の注㉔を参照。

㉝ Robert Owen, Report, p. 285, 邦訳八五一六ページ。。。。。。は原文イタリック。いかに金銭的利益が強調されているかがわかる。

四 ウイリアム・フォラの書簡

鋤による深耕をさまざまな角度から実験したその結果をゲイツヘッド(ニューカスル近くのタイン川沿いで北緯約五五度。チェスターとニューカスルを結ぶローマ道路の起点であった)の種苗栽培・販売業者、ウィリアム・フォラは、その結果をオウエンあての書簡で明らかにしている。この書簡は、一八二〇年十一月一三日となっており、同年五月一日付けの『ラナーク州への報告』より後のものである。だが、オウエンは、もともと以前からフォラにたいして、鋤耕

作について問い合わせていたらしい。この書簡にも「失礼ながら、私は数か月前にあなたに申し上げましたように……」^①などの記述がみられ、オウエンが『ラナーク州への報告』を書くに当たり、フォラから意見をきいていたことがわかる。オウエンの晩年の同時代人、ウィアム・サーガントが鋤耕についての「オウエンの特別のよりどころは、かれが絶対的信頼をおいていたゲイツヘッドのフォラ氏であった」^②とのべている。

フォラは、すでに「一六年あるいは一八年前に、この方法〔鋤耕作〕で自分の経営を拡大していった」^③が、それとともに、鋤を用いるための人手を集めることができず、再び犁を用いることにしたという。犁の利用は、馬の足で土壌をふみつけて耕やした土地をかためてしまうことはないが、^④「犁の継続的使用は、やがて木などの健康と生長力にぶらせるという悪い影響を与えた」^⑤。「鋤の利用で、私は九インチないし一〇インチ〔約二五センチ〕の深さに土壌を耕やすという結果を得た。この深さは、ダーラムやノザンバーランドの諸州で利用されている犁による深さの約二倍以上である」^⑥というのであるから、当時の犁耕がいかに浅いもので、粘土質のイングランド北部あるいはスコットランドの土壌での小麦栽培が困難であつたかがわかる。これだけ深く耕やせば、「わが国の強い粘土質土壌に、余分の水をさばき、作物の根を生長させることを可能にする」^⑦とフォラはのべている。

ついでフォラは「四年間続けた」という実験の具体例を示している。ばら蒔き、畝蒔きのそれぞれのばあい、畝蒔きでも畝間隔、株間隔をそれぞれかえたばあいなど、かなり詳しい実験結果を示している。^⑧しかし、ここでは、これらすべてを示す必要はない。深耕が問題だからである。一エーカー当たりの犁と鋤による耕作を比較すると、つぎのとおりである。犁耕費一ポンド一〇シリング、播種費（種子小麦が一エーカー当り二ブッシェル必要として）一ハシリング、中耕費二シリングで、合計二ポンド一〇シリングである。これにたいして、鋤耕費一ポンド一三シリング、播

種費（やはり二ブッシェルとする）一ハシリング、中耕費四シリングで、合計二ポンド一五シリングである。^⑨これによると、鋤耕のほうが五シリング多く費用がかかる。だが、収穫は、犁耕のばあいが一エーカー当り三八ブッシェル、一ブッシェルハシリングとして、一五ポンド四シリングであるのにたいして、鋤耕のばあいは六八・五ブッシェルで、二七ポンドハシリングの収入となる。一エーカー当り五シリング多く支出して、一二ポンド四シリング多くの収入があげられるという。^⑩

フォラはこの書簡の結論の箇所でつぎのような計算も行なっている。鋤を用いれば、馬は不要になる。一頭の馬の飼育に四エーカー半が必要である。その土地で「鋤による耕作をやれば、じつに一二人以上の人間の十分な生計が得られる」という。だが馬がいないと肥料に困るという心配もある。しかし、これについては「最善かつ最強の人尿」がある。人尿を保存することは宗教的理由によりきらわれているが、その困難は容易に除去される。グラスゴウのような都市では、おそらく一年に二万ポンドの価値の人尿が供給される。^⑪これらの点から、鋤耕作はあらゆる点を差し引いても有利であるというのである。

さらにフォラは、この書簡の後半において婦人・少年・少女および力弱い老人など貧困者を雇用するために二本鍬（二枚刃のくわ）で実験した結果にふれている。これは明らかにオウエンの意図にもとづくものである。私の実験の「主要目的は、土壌耕耘に教区救済に依存している人びと、すなわち婦人・少年・少女、力弱い老人を雇用することができる」とすれば、それはどの程度であるかを確認することでありました」。この実験の結果として詳細に賃金計算と作業能率とを検討している。その結論だけを示すと、かれらの賃金を一日一〇ペンスとすれば、成人男子より費用がかかる。耕耘作業も二本鍬で五、六インチの深さで、それほど有利ではないと経営者らしい判断をしているのである。

る。だが、フォラは「少女たちのすぐれた点は、別のところに価値があり、満足している」と書いている。そして「あなたの制度は、ひじょうに効果的に採用されるかも知れません」^⑫と。これにより、オウエンの主張する鋤耕のための費用は、成人男子であれば採算はとれるが、婦人・子供などでは不利になることが明らかにされた。ただ、フォラは少女については、どの作業をさせると、すぐれているのかについては、具体的には説明されていない。

以上のフォラの計算は、明らかに資本主義的農業経営者の感覚である。^⑬フォラの考え方が直ちにオウエンの思想と結びつけることは不可能であるが、少なくとも、オウエンの主張する鋤による耕作が、何の検討もなしに無意味で、中世の村落共同体を指向したものだという、たとえばガットレルのような見解とは明らかに正反対のものであるといえる。オウエンの生産力把握は、産業革命期のブルジョアジー、とくにイギリス第一級の綿紡績工場の経営者としての生産力把握として、ずば抜けたものであったが、それが明らかに、農業部門にも向けられていたのである。

注

- ① A Communication from Mr. Falla, detailing the Experiment of four successive Years in Cultivation of Wheat by the Spade, 1820, in A Supplementary Appendix, p. 319. 以下 Falla's Communication と略記。
- ② William Lucas Sargant, Robert Owen, and his Social Philosophy, 1860, London, Reprinted by AMS Press, 1971, New York, p. 168.
- ③ Falla's Communication, p. 315. [] 内引用者。
- ④ この部分は『ネットワーク州への報告』における「馬の足がたえずふみつけることが土壌を固める」というオウエンの記述の訂正と思われる。
- ⑤ Falla's Communication, p. 315.
- ⑥ Ibid., p. 315. [] 内引用者。
- ⑦ Ibid., p. 315. [] 内引用者。
- ⑧ Cf. Ibid., pp. 315-17. このあぶつの実験は「ノッティンガムでの実験」である。これについては、紙面のついでにより調査する。
- ⑨ Ibid., p. 317.

⑩ Ibid., p. 318.

⑪ Ibid., p. 320. は引用者。イギリスでは土壌の性質上、人糞尿は用いられていなかったといわれているが、これは宗教的理由によるものである。それどころか、イギリスの一部の地方においても古くから使用されていたらしい。

⑫ Falla's Communication, p. 319.

⑬ 椎名重明『前掲書』三七七ページ以下参照。フォラのあげている犁耕費は、アーサー・ヤングによって示されている数値とほぼ一致しており（『同書』三八〇ページ参照）、精度の高いものと思われる。

五 『真理の鏡』と農業生産力

『真理の鏡』“The Mirror of Truth” は、一八一七年に出されたオウエンの最初の機関誌である。この創刊は九月二六日金曜日と考えられるが、オウエンはすでに九月一九日に誌名を明確に示して、この創刊を予告し、「月二回発行する」ことをのべている。^①だが、これは二か月で廃止された。自分では、これを「新聞」Papersと呼んでいるが、筆者の接したものは、A 5版のページもので、雑誌形態のものである。

これには、じつにさまざまな記事が書かれているが、大別すると四つである。「新社会観」の解説、ロンドンの新聞に掲載されたオウエンの文章の再録、農業技術の紹介、オウエン氏の計画反対者に対する解答がこれである。ここでは全体に言及することは不可能であるため、農業技術の問題を中心に取り上げる。しかし「新社会観の解説」において、機械論が展開されているが、農業論は、これとの関連であらわれてくる。つまり、機械生産力は物資の供給過剰をもたらす。だが、機械による生産は価格を引き下げ、またその製品の不足している外国へ向けられる。このため、自国では、その収入の分だけ人口が増加し、それが市場を創出するはずであるという。^③だが、怠惰と貧困な人間

が存在していただけでは、現実の需要とはならず、したがって、怠惰を矯正しなければならぬが、そのためには、雇用を与えるための場が必要である。そこで貧民の「救済策は一つしかない。……怠惰な人間を雇用することである。どこに雇用するのか。それは土地耕作に」^④と。しかし、フォラの書簡を検討したように、失業対策としての農業であつたとしても、それはたんなる失業対策ではなく、やはり経営がなりたつかどうかの、事業計算を行なう農業経営者の生産性を考慮しているわけである。

オウエンの農業観は、かれの全思想的位置からすれば、副次的であるかのように思われるけれども、『真理の鏡』の「農業」と題する記事の冒頭にはこう書かれている。「この重要な科学の問題にかんして、知識の全般的な貯えをふやすことができれば、それは社会全体にとって、ひじようにはつきりした利得とみなされなければならない」^⑤と。ついで詳細な農業技術について説明されている。^⑥まず、作物が発芽するまえに雑草が生い茂り、作物の生育をいちじるしく阻害する。そこで雑草より早く作物が生長する方法を発見することが必要となるわけである。つまり、「人工的に作物を生長させる」ための方法である。そこで、にんじんを例にした実験がつぎのように示されている。「にんじんは、若干のすすを加えて、同じような方法〔羊の糞と粘土の多い土を等量にして水をまぜ、それを沸騰させたのち、それをなまめるくなるまでまつ。それを種子にかぶせ、そのうえに消石灰をかきまぜて種子に付着させる〕で準備された種子をまく。これを湿った状態のまま放置し、肥料がほどよい温度を保つようにつつんでおく。それは六日間で種子から芽を出すだろ。う。そうなつたら、砂の多い土を一〇倍の割合で〔芽を出した状態の〕種子とまぜる。一〇日か一二日間でにんじんの芽が地上にあらわれる。その芽は完全に地表を覆う状態なので〔つまり密植状態になるので〕、雑草の生える余地がない。適当な時期に間引くと、大きくて上等の作物が収穫できる」^⑦と。だが通常の方法

でにんじんを播種したのでは、芽が地上に出るまで六週間かかり、それまでに雑草が勢力を得て、作物が生育する余地がなくなってしまうのであるが、右の方法ならば、発芽が二週間に短縮でき、雑草の害はほとんどなくなるという。これは中国の技術を取り入れた「Yevoy」氏の実験であるという。

ついで、フランドースの一地方で長年行なわれた、ベト病予防の効果が大きいという方法が示されている。「六ブッシュェルの小麦にたいして、半ポンドの緑青〔塩基性炭酸銅(分子式 $CuCO_3$)、炭酸ガスと銅の化合物〕を粉にする。上に軽い小麦が浮くぐらいの人尿をまぜる。それから浮いたものをすくい上げる。そのために、小麦を器のなかでときどきかきまぜる。種子を三時間この液のなかにつけ、それから石灰で乾燥する。あるいは石灰なしでもかまわない」^⑧。この方法で播種された小麦は、春の発芽期に雨が多いがそれでも生育がよく、ベト病にかかりやすい小麦もそれにかからずすみ、収穫量が多いという。これと同じような方法は、偶然「名高い自然主義者、ベネディクト・プリヴォスト氏によって発見された」という。これらの技術は、集約的農法を示したものであるとして注目される。

『真理の鏡』における農業の記事は、種子穀物の選び方などにも言及し、当時としてはかなり高水準であった。そして、この記事の最後でこう結んでいる。「われわれは、ときどき、このもつとも関心ある問題にたいして、有用で望ましい実験や発見などの紹介を以後もとり上げるつもりである」^⑨と。この時期の農業における最大の変革は議会開い込みであるといわれているが、この記事のなかには開い込みのことはひとこともふれられていない。だが、『真理の鏡』に掲載されたような集約的農業技術は、やはり「農業革命」ともいわれるべき、技術革新であったにちがいない。なるほど、資本主義的農業経営は、開い込みの進行とともに、つまり大農場制の形成とともに成立したのは事実であるが、上述のような農業技術の改良、とくに集約的農法も、農業の資本主義化に果たした役割は、少なくないのである。

囲い込みの進行と、農業技術の開発^①集約的農法の採用は必ずしも並行して進行したわけではない。「土壌、地面の起伏の状態、気候などによって左右された」からである。『真理の鏡』に示された実験の例、すなわち集約的な技術は、いかにして農業生産力を高めるかという、工業用の機械を発明するのと同じように、より高い生産力を追求した農業方法を示したものである。フォラの実験も、この意味において『真理の鏡』と同じように集約度の高い農業方法を示したもので、いずれも農業における生産力の上昇を指向したものである。このことを明示した『真理の鏡』における記事は注目に値する。「当面の大きな目的は、人間の労働力を減少させることであり、生産物の量を増大させることであり、できるだけ時間的損失を小さくして土地からの生産物を獲得することである。さらに、これらの目的を達成するために用いられる資本を、最低の額にまで減少させることである」と。これについては、もはや説明を要しない。つまり、集約的農業において、資本節約、労働節約、生産期間の短縮という、もつとも能率的な資本主義的経営目標^②生産力視点にもつくものであるといえる。

注

- ① Robert Owen, Address on Measures for the Immediate Relief of the Poor, September 19th, 1817, in A Supplementary Appendix, p. 140. ② Address は九月三日付けの "Daily Journal" に掲載されたもので、十一月七日付けの "The Mirror of Truth" に再録された。③ (The Mirror of Truth, Nov. 7, 1817, p. 39, seq.)
 The Mirror of Truth は筆者を明示しておらず、Mr. Owen の文字が頻繁に出てくるが、つぎの理由から、ほぼオウエンの文書、もしくはオウエンの思想の一端を示すものと考えて誤りないものと思われる。
 ⑦ オウエンは自分の書いた文章のなかでも Mr. Owen's Plan, Mr. Owen's Bill などと用い、『自叙伝』付録の論文集のタイトルにも、この種のものが数多くある。
 ⑧ 一八一七年段階にオウエンの考えを相当の長文にまとめ上げるこのことができる人物がいたとは考えられない。
 ⑨ 編集上かなり細部にわたることがらまで、九月一九日付けの Address で予告している。

⑤ 全体にわたり論旨やあの特徴的な文体が酷似している。[例] If in attempting to enlighten the minds of those whom we consider to be in error, *we fail* to produce conviction, we are certainly not entitled to manifest our disappointment to their prejudice; no blame can attach to them. The powerful circumstances by which they have been surrounded —— the force of education —— the prevailing influence of parents —— may have so far moulded and perverted their faculties, as to disable some from deriving, and to preclude others from avowing, conviction from the demonstrations offered to them. (The Mirror, Oct. 10, 1817, p. 5.) 1) の文末には Ed. とあるだけである。

⑥ The Mirror of Truth 2) 「本誌は Mr. Owen's Plan を世にひろめることを目的としたものである」とあり、「オウエン氏の新社会観における難解箇所と思われる部分の平易な説明」と題する記事があり、かれの性格形成論の説明がかなりのスペースにわたって掲載されている。しかしながら、主として農業についての記述は、他の雑誌から再録された部分もあり、これらの記述が、すべてオウエンのものであるという決め手はない。だが以上の理由から、オウエンの考えと根本的に異なったことが本誌に掲載される可能性はほとんどありえないと考えられる。したがって、本誌の内容は、もともとひかえめにいつても、オウエンの思想の一端を示すものと評価することができる。

⑦ これについては、すでに紹介した。拙稿「産業革命と空想的社会主義」三八—四〇ページ参照。

⑧ The Mirror, Oct. 10, 1817, pp. 27-8.

⑨ Ibid., p. 30. この文言だけを見れば、オウエンの主張する勤耕は、失業救済事業のようにみえる。筆者はそうは考えていないが、かりにそうだとすると、怠惰な貧民を土地耕作に雇用できれば、怠惰者は矯正され、当時のブルジョアジーの必要とした労働力陶冶が可能となり、貧民自身を維持できるのであるから、地主・ブルジョアジーに重い負担となっていた救貧税からも解放されるという、当時のブルジョアジーにとって二重の利益が得られる。これは、当時のブルジョアジーや地主の救貧税にたいする共通の認識であった。

⑩ The Mirror, Nov. 7, 1817, p. 44. この記事の筆者も Ed. とあるだけである。

⑪ これについては、一部すでに紹介した。「同論文」四八ページ。本稿では、これと重複を避ける意味から別の例を示した。

⑫ ⑬ The Mirror, Nov. 7, 1817, p. 46. ⑭ ⑮ 内引用者。⑮ に示した方法は、小麦の栽培にも応用される。これが採用されると、早く芽が出るので「一九一〇月に播種するものが二月にしても八月上旬には立派な作物が収穫される」と。この実験はやはり、Levy 氏の実験によるというが、実イングランドやスコットランドで二月に播種できるかという疑問はある。なお、この記事については、「Sonni's Journal」(スベルは原文どおり)を参照せよ」と記されている (Ibid., p. 45)。

⑯ Ibid., p. 48.

⑰ しかし、ミンゲイは、これを通説のように評価していない。むしろ評価はひかえめである。Cf. G. E. Mingay, op. cit., pp. 15-6. 拙訳一三九—四〇(頁)を参照。

⑱ Ibid., p. 20. 拙訳一四五ページ。

② The Mirror of Truth, Nov. 7, 1817, p. 45.

六　　む　　す　　び

以上、オウエンの性格形成論との関連において、かれの農業論を検討してきた。かれの性格形成論は、貧民を救済法にたよらずに救済するために、かれらに「雇用を与える」必要があるが、そのために貧民の怠惰を矯正する、「労働力陶冶」という当時のブルジョア的要求をもつものであった。しかし、イギリス資本主義の確立過程である産業革命進行中の一八一五年および一八一九年に、早くも恐慌を経験することになった。失業が街にあふれ、商品が倉庫に山積みにされ、困窮者はふえる。俊敏なる経営者ロバート・オウエンはこの事態に鋭く反応した。かれの基礎理論である性格形成論を具体化するための「雇用を与える」その場がなくなった。そこでオウエンは、人間の第一に必要とする物資を生産する農業に目をむけた。かれはすでに『新社会観』第四論文において、マルサスを批判し、こうのべているのが注目される。「かれ『マルサス』は、総明で勤勉な国民は無知で悪政のもとにある国民が生産するところよりも、いかに多くのものと同じ土地から生み出すものであるかを、われわれに語らなかつた。だがそれは無限大対一の関係にある。なぜなら、人間は自己の食糧生産力にたいする限界を知らないからである」と^①。

オウエンは、一八一五年の恐慌を経験することにより、基本的には右の考え方を前面におし出して、貧民や失業者を土地耕作に雇用できないものかを真剣に考え出した。それが端的にあらわされたのが、『真理の鏡』(一八一七年)である。だが、同年の三月にすでに鋤による耕作を提案しはじめていたのである(『貧民労働者救済委員会への報告』

本稿三の註④)。したがって、オウエンの主張する鋤耕作の主張をはじめ農業技術にたいする関心は、性格形成論を發展させた延長として、むしろ必然的なものであった。本稿二において検討したように一八一七年以後のオウエンと一八一二年のオウエンとは、思想的な連続性が大いに認められる。このことは、かれの農業論においても、まったく正統であることが理解されるのである。この意味からも、オウエンが社会主義者に転換したとみるのは困難となるばかりか、恐慌を経験したオウエンは、ますます明確に、かれの基礎原理である性格形成論をかざして多弁にさへなっていくのである。その頂点にあるのが、かれの主要著作の一つである『ラナーク州への報告』なのである。

ところで、オウエンは農業を「貧民に雇用を与える」ための手段と考えていたのは事実である。しかし、それだからといって、農業生産力は無視されていたわけではない。それどころか、すでに検討したように、さまざまな角度からそれを考察している。鋤耕作の主張もそのうちの一つである。かれが『ラナーク州への報告』における理想社会を描くとき、無限に生産力の上昇を展望した社会、すなわち、農業と工業とが調和する社会を構想したのであった。

しかし、現実には鋤耕作は行なわれなかったではないか。オウエンの農業にかんする提案は何一つ実現されなかったではないか。なるほど、一八六〇年、ウィリアム・サージェントは、オウエンをこう評している。『ラナーク州への報告』が書かれてから、「四〇年を経過し、積極的な改善が行なわれてきた。その間、鋤耕作はほとんど進歩のないままである。……馬のかわりに人間の労働力を、精巧な犁のかわりに単純な鋤をという、われわれがふつうあまりきかない議論は時代錯誤である」^②。このオウエン評は、すべて結果だけをみて評価するやり方である。大発明の背後には多くの試行錯誤がある。しかし、大発明に到達したもののみが意義あるとはかぎらない。その目的意識が評価されなければならない。本稿で示した技術が実際に応用されたかどうかは不明である。しかし、その目的意識は、農業

生産力の上昇を願っていたことは、もはや疑いえない。フオラの実験した鋤耕作が実用化されなかったとしても、その目的意識は同じである。オウエンの意図は、鋤耕作により食糧の多大な増産を可能にし、「一億をはるかに越える人口」^③を養うことにあった。

オウエンは、すでに人口増加は「需要の増大」をもたらすものであることを認識していた。無限に上昇する工業生産力、機械生産力を前提とすれば、無限に拡大する市場に有効需要増大が必要であった。オウエンの農業生産力の認識は、じつは農業経営者のための生産力論ではなく、製造工業の経営者ブルジョアジーの立場からのものであったといえる。別のいい方をすれば、『ラナーク州への報告』の問題意識、すなわち「生産と同じ規模の市場を創出する」農業・工業の共同体の必要性は、無限の工業生産力の上昇を求めていることによるものであり、この意味からも、この『報告』が、一八一二—三年段階のオウエンの延長であり、より徹底化したものであるということができる。

このことは、「工業を付属物としてもつ農業に従事している全住民」^④からなる社会主義的共同体のあり方とは基本的に矛盾する。オウエンの描いた共同体、すなわち資本主義生産様式下の生産力論にもとづく農業中心の社会主義的共同体は、無限の工業生産力の発展のためという、まさに矛盾した、現実には「ありえない」、したがって「空想的」な体系であると考えざるをえないのである。

オウエンは、イギリス産業革命期の綿紡績工場の経営者として成功した。しかし、産業革命という激動のさなかにあつては、社会的にさまざまなひずみを生じた。多感・俊敏な経営者オウエンは、それを黙視することができなかった。オウエン思想の多面性は、まさにイギリス産業革命期の社会の複雑な変化の反映であり、「鏡」であった。だが、さまざまなオウエンの思想的側面のなから、共通なものをみい出すとすれば、まさに経営者ブルジョアジーとし

ての側面であろう。当時においても生産力を把握できる立場にあったものは、ほかならぬブルジョアジーであったからである。

注

① Robert Owen, *A New View of Society: or Essays on the Principle of the Formation of the Human Character, and the Application of the Principle to Practice*, 1813, in G. D. H. Cole (ed.), op. cit., p. 85. 楊井克巳訳『新社会観』(岩波文庫、一九五四年)一三九ページ。この邦訳はもう一種ある。斎藤新治訳『性格形成論——社会についての新見解——』(明治図書、一九七四年)。傍点は引用者。オウエンのマルサス批判は各所に散見される。この箇所はその代表的なものであろう。なお、マルサスの『人口論』の初版は一七九八年で、改訂版が出版されたのは、一八〇三年である。

② William Lucas Sargant, op. cit., pp. 167-8. 同時代人(リカアドウ)のオウニン論については、堀経夫氏のつぎの二論文を参照。「オウエンの『計画』に対するリカアドウの批判」(ロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集——ロバート・オウエン生誕二百年記念——』(家の光協会、一九七一年)、「ロバート・オウエンとデイヴィッド・リカードウの対立——彼らの生誕二〇〇年に因んで——」(『日本学士院紀要』第三〇巻第三号、一九七二年六月)。堀氏は後者論文において、オウエンの「踏みぐわ耕作」(筆者のいう鋤耕作)について、リカアドウの見解を紹介されている。リカアドウは「踏みぐわ耕作の方が生産にとってより有利である、とオウエン氏は勧告している」とのべ、つぎのような主旨のことを表明しているという。「いまわが国で欠けているのは労働にたいする需要であるが、もし踏みぐわ耕作が有利なものであるとすれば、それは労働にたいする需要を与えるから、有益なやり方であらうと」(九四ページ)。このリカアドウの見解は、本文に示したサーガントのオウエン評とくらべると、オウエンの意図を正当に評価している。リカアドウのオウエン評価は、やはり当時のブルジョア経済学者らしい見解と思われる。

③ Robert Owen, *Report*, p. 259. 邦訳三二ページ。

④ *Ibid.*, p. 266. 邦訳四七ページ。